

## プレ・ワークショップ

# フォトボイスとフェミニスト・アクション・リサーチ —プラクシスをめざして—

講師：吉浜美恵子（ミシガン大学社会福祉学大学院教授）

プラクシスPraxisということばを聞いたことがあるだろうか。実践、実行、行動などと訳され、「理論」と対比されて用いられることもあるが、理論と実践の融合（たとえば理論に基づいた実践）がプラクシスである。プラクシスに不可欠なのはcritical consciousness。これもうまく日本語で表現できない概念であるが、社会のなかで自分や他者が置かれた位置・状況を分析するなかで、社会文化的、構造的、政治的な仕組みやその矛盾を掘り起こし、変革のための道筋を模索する一連のプロセスと考えられよう。パウロ・フレイレ（Paulo Freire, 1970, 2005）は、抑圧された人々の解放には、conscientização [conscientization意識化] やcritical consciousness [批判的意識] の開発・強化が不可欠であると説いた。Conscientizationはフェミニズムの運動の伝統でもある。

調査研究活動はknowledge development [知識の構築] のひとつととらえられ、どのような知識をどのような方法で構築するかのみならず、どのような視点（認識論、理論）から何のために構築するかが重要である。誰が知識を構築するか、というより、誰が構築することを“許されるか”、そして誰が構築した知識が“正当とみなされるか”も議論の的となる点である。

性差別、性に基づく抑圧の根絶、ひいては女性の解放をめざし、社会制度や人々の意識を変革することを目的としているフェミニスト・アクション・リサーチは、critical consciousnessやプラクシスを通じた知識の構築ともいえる。フェミニスト・アクション・リサーチは、調査の結果だけではなく、調査を実施する過程自体もが、変革につながるよう企画され、調査参加者の主体性や主観性を重視する。調査参加者は、被調査者、データ提供者ではなく、知識の協働構築者である。フェミニスト・アクション・リサーチの理念に沿ってその目的を達成するためには、方法論上や倫理的な課題は多い。

ワークショップでは、フェミニスト・アクション・リサーチの根底にある認識論や理論をはじめ、調査企画実施における姿勢や調査倫理、方法論などを体験し学ぶ。参加型演習を多用し、フェミニスト・アクション・リサーチのみならず、参加型アクション・リサーチやコミュニティにもとづく参加型リサーチ [community-based participatory research, CBPR] の実例を検討する過程で、フェミニスト・アクション・リサーチの根幹なるものに迫ってみたい。なかでも、

フォトボイスという参加型の方法を応用したプロジェクトを中心に、誰がどのような視点からどんな目的のためにどのような知識を構築するのかを考えたい。

フォトボイスは、海外では社会や地域の課題を掘り起こし、その解決のために広く用いられている参加型の手法で（Wang, 1999; Wang, & Burris, 1997）、特に社会の中で脆弱な立場にある者の権利や福祉の向上をめざした調査研究や社会的アクションに多用されている。知識の構築、教育・学習、社会的アクションという3面的な活動（Hall, 1984）を統合している。（注：講師吉浜は、過去にラオスからのモン族難民女性と米国中西部で実施したフォトボイス・プロジェクトの経験をいかし、東日本大震災後に、被災した女性たちのフォトボイスを使ったアクション・リサーチを継続して実施している。防災、災害対応、復興などにおける課題やニーズを掘り起こし、解決のための道筋を研究者や支援者とともに考え、政策や支援などのアクションにつなげることをめざしている。参加メンバーは生活や地域の状況を写した写真を持ち寄り、自分たちの経験の意味や防災や復興のありかたのみならず社会全体の課題について小グループで話し合いを重ねている。社会に伝える「ボイス（声）」を作り、写真と声をセットにして展示したり、報告会で写真の背景や伝えたいメッセージを発信してきた。撮影された写真と添えられた「声」、録音されたミーティングや報告会の様子など多様な形態のデータは、多重レベル（地域、個人、写真など）にネスト [Nest] されていて、しかも時系列 [longitudinal] でもある。このようなデータの分析の可能性は、質的 Vs. 量的といった従来の枠組みを超え、フェミニスト・アクション・リサーチの地平線をひろげていくことができるのではと考える。）

ワークショップでは、実際にフォトボイスを体験する。参加者（受講生）が実際に街（キャンパス）に繰り出し、写真を撮る。撮った写真を持ち寄り小グループで話し合う。実際にフォトボイスに参加する（限定的な時間ではあるが）経験を通して、客観性と普遍性、主観性と相互主観性、reflection [省察] と reflexivity [再帰性]、theory [理論] と theorizing [理論化] などについて掘り下げる。

フェミニスト・アクション・リサーチの理論と実践を共に学ぶこのワークショップ自体が、critical consciousnessやプラクシスを促進する機会となることを願っている。

※デジタルカメラかスマートフォンを持参してください。実際に写真を撮り話し合います。

## 文献

- Freire, P. (1970). *Pedagogy of the oppressed*. New York: Continuum.
- Freire, P. (2005). *Education for critical consciousness*. New York: Continuum International Publishing Group.
- Hall, B. (1984). Research, commitment, and action: The role of participatory research. *International Review of Education*, 30, 289-299.
- Maguire, P. (Ed.). (1987). *Doing participatory research: A feminist approach*. Amherst, MA: The Center for International Education.
- Reid, C., Tom, A., & Frisby, W. (2006). Finding the 'action' in feminist participatory action research. *Action Research*, 4, 315-332.
- Reinharz, S. (Ed.). (1992). *Feminist action research in feminist methods in social research*. New York: Oxford University Press.
- Ristock, J.L., & Pennell, J. (1996). *Community research as empowerment: Feminist links, postmodern interruptions*. Toronto: Oxford University Press.
- Wang, C.C. (1999). Photovoice: A participatory action research strategy applied to women's health. *Journal of Womens Health*, 8, 185-192.
- Wang, C., & Burris, M.A. (1997). Photovoice: Concept, methodology, and use for participatory needs assessment. *Health Education & Behavior*, 24, 369-387.

## 講師紹介

米国カリフォルニア州UCLAにて社会福祉博士号および修士号取得。カリフォルニア州とミシガン州においてソーシャルワーカー免許を保持し、臨床経験も豊富。社会福祉実践、調査研究を通して女性や移民などマイノリティーの権利と福祉向上をめざす活動を続けている。日米でフェミニスト・アクションリサーチを多岐にわたり実施している。夫(恋人)からの暴力」調査研究会(日本 1991年)や、全米組織Asian & Pacific Islander Institute on Domestic Violence(サンフランシスコ 1998年)、New Visions: Alliance to End Violence in Asian / Asian American Communities(ミシガン 2001年)など多数プロジェクトを立ち上げる。東日本大震災後、東北各地でフォトボイスの手法を使ったプロジェクトを継続実施中。

### 主な著作

- 吉浜美恵子・ゆのまえ知子・柘植あづみ・池田恵子・正井禮子(2013).『東日本大震災「災害・復興時における女性と子どもへの暴力調査」報告書』東日本大震災女性支援ネットワーク
- 吉浜美恵子・釜野さおり(2007).『女性の健康とドメスティック・バイオレンス——WHO国際調査/日本調査結果報告』新水社
- 「夫(恋人)からの暴力」調査研究会(2002).『新版ドメスティック・バイオレンス——実態・DV法解説・ビジョン』有斐閣
- 福島喜代子・吉浜美恵子(2003).「ドメスティック・バイオレンスを受けた女性のサポートグループの必要性と企画・運営についての考察」『ソーシャルワーク研究29(2)』, 38-44頁
- Yoshihama, M., Ramakrishnan, A., Hammock, A.C., & Pasha, M.K. (2012). Intimate partner violence prevention program in an Asian immigrant community: Integrating theories, data, and community. *Violence Against Women, 18*, 763-783.
- Yoshihama, M & Bybee, D. (2011). The Life History Calendar method and multilevel modeling: Application to research on intimate partner violence. *Violence Against Women, 17*, 295-308.
- Yoshihama, M. (2009). One unit of the past: Action research project on domestic violence in Japan. In J. Sudbury & M. Okazawa-Rey (Eds.), *The challenge of activist scholarship: Antiracist feminism and social change* (pp. 75-94). Boulder, CO: Paradigm Publishers.
- Yoshihama, M. (2005). A web in the patriarchal clan system: Tactics of intimate partners in the Japanese socio-cultural context. *Violence Against Women, 11*, 1236-1262.
- Yoshihama, M., & Carr, E.S. (2002). Community participation reconsidered: Feminist participatory action research with Hmong women. *Journal of Community Practice, 10*, 85-103.
- Yoshihama, M. (2002). Battered women's coping strategies and psychological distress: Differences by immigration status. *American Journal of Community Psychology, 30*, 429-452.
- Yoshihama, M. (2002). The definitional process of domestic violence in Japan: Generating official response through action-oriented research and international advocacy. *Violence Against Women, 7*, 339-366.